

資料

大学学園祭を活用した検診車による子宮頸がん検診の試み

中野 智裕¹⁾・濱田 維子²⁾・井上 福江²⁾・伊藤 裕司³⁾

純真学園大学 保健医療学部 検査科学科¹⁾・同看護学科²⁾・同医療工学科³⁾

Trial of the uterine cervix cancer screening with the examination car using a university school festival

Tomohiro NAKANO¹⁾, Yukiko HAMADA²⁾, Fukue INOUE²⁾, Yuji ITOH³⁾

Department of Medical Technology, Faculty of Health Sciences, JUNSHIN GAKUEN University¹⁾

Department of Nursing Faculty of Health Sciences, JUNSHIN GAKUEN University²⁾

Department of Medical Engineering Faculty of Health Sciences, JUNSHIN GAKUEN University³⁾

要旨: 2008年3月に「福岡県がん対策推進計画」が策定され、この中でがん検診受診の目標値として2012年度末までに受診率50%以上達成が掲げられている。しかし、福岡県下での、子宮がん検診受診率は2011年度で20.3%である。今回、我々は福岡市、福岡市南区保健所、日本臨床細胞学会福岡県支部と協力し、本学園祭に検診車を招請し、学生に受診機会を提供し、その上で、若い人達の検診受診率を向上するための方策を考えた。

〈結果〉2012年度87名(うち本学学生65名)、2013年度63名(うち本学学生50名)、2014年度70名(うち本学学生57名)が受診し、学生受診者での要再検者数は、24年度2名、25年度1名、26年度1名であった。

〈考察〉「無料だったから」、「産婦人科に行く必要がないから」などが受診行動に結びついたと考えた。また、受診行動に関係する要因として「一緒に受ける友達がいたから」も大学構内で検診を実施するからこそ可能な状況だと考える。

キーワード: 子宮がん検診, がん検診受診率, 学園祭, 学生, 受診率向上

Abstract: "An anti-Fukuoka cancer measure promotion plan" was devised in March, 2008, and the achievement showed that more than the targeted consultation rate of 50% during cancer examination consultations were met by the end of 2012. However, an uterine cervix cancer examination consultation percentage in Fukuoka was only 20.3 % by 2011. We cooperated with Fukuoka-shi, Minamiku, Fukuoka-shi public health centers and Japan clinical cytology society Fukuoka branch offices this time and invited an examination car to the school festival and offered a consultation opportunity to any student and with that in mind, thought about a policy to improve the examination consultation rate of young people.

Keyword: Uterine cancer examination, a cancer examination consultation rate, school festival, a student, consultation rate improvement

1. 背景

2008年3月に「福岡県がん対策推進計画」が策定され、この中でがん検診受診の目標値として2012年度末までに受診率50%以上達成が掲げられている。しかし、福岡県下での、子宮がん検診受診率は2011年度で20.3%である。さらに、福岡市で子宮癌検診率を見た場合には、19.6%と全国平均の23.8%を大きく下回る¹⁾。また、現在の在

学生で1992年～1994年生まれの学生は、HPVワクチン公費補助開始時には、既に対象外の年齢であり、ワクチンの接種や十分な子宮頸がん予防教育を受けていない可能性が高い。1992年～1994年生まれの大学生を対象にした子宮頸がん予防教育と検診受診行動の促進が喫緊の課題であると考えた。

我々は福岡市、福岡市南区保健所、日本臨床細

胞学会福岡県支部と協力し、本学学園祭に検診車を招請し、学生に受診機会を提供した。その上で、若い人達の検診受診率を向上するための方策を考えた。

2. 子宮頸がん検診受診啓蒙活動

子宮頸がん検診への啓蒙活動として、2011年度より「子宮の日」の活動を純真学園キャンパス内で行い、その際に子宮頸がんとはどういう病気か、子宮頸がん検診を受診する意義等を記載したパンフレットを配付した。

2011年度には大学サークルである「ピアエディケーション」の学生達が主体となり、子宮頸がんや子宮頸がん検診についての様々なアンケートを実施した。アンケートは無記名自記式を配付し、解答は任意であること、匿名であること、プライバシーは保護されること、学術以外には使用しない事を口答で説明を行った。アンケートの回収をもって同意が得られたものとした。アンケートの対象者は、純真学園大学1年生、純真短期大学1、2年生でいずれも18歳～19歳が大部分を占める296人であった。アンケートの結果(図1～8参照)では、Human papillomavirus (以下 HPV) ワクチン

について、「ワクチンの存在を知っている」が65.2% (193/296)、「ワクチンの接種を受けていない」が98.3% (291/296)、また、HPV については、「一度でもセックスの経験がある女性であれば、感染する可能性がある」が64.5% (191/296)、子宮頸がんについては、「名前は知っているが、どんな病気か知らない」が46.2% (137/296)、「HPV が原因である」が39.3% (136/296)、「20代、30代の若い女性に増えている」が70.6% (209/296)、子宮頸がん検診については、「検診の存在を知っている」が78.7% (233/296)、「検診を受診したことがある」が3.0% (9/296)であった。

また、子宮頸がんを受けていない理由では、「お金がもったいない又は費用が判らない」が11.1% (33/296) や「検診の行き方が判らない」が13.2% (39/296) などの解答が比較的高かった。

HPV の感染と子宮頸がんの関係について、河合ら²⁾の報告では17.9% が関与を知っているであったが、本学アンケートでは39.3% と比較的認知度が高かった。本学ではアンケートの対象者に医療系の学生が含まれていたことが理由として考えられる。

また、過去に行われた同様のアンケートでは、

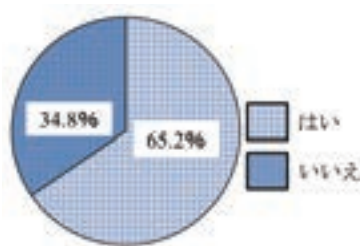


図1. ワクチンの存在を知っていましたか。(n=296)

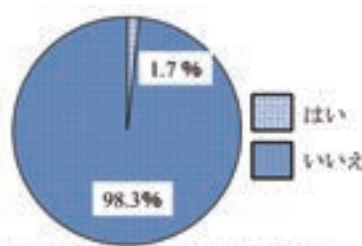


図2. あなたはワクチンを接種していますか。(n=296)

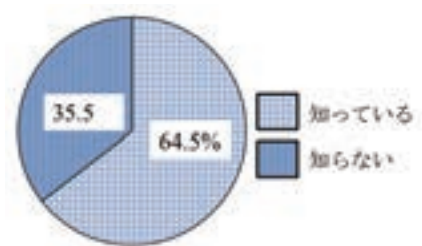


図3. HPV は一度でもセックスの経験があれば、感染する可能性があることをしていますか。(n=296)

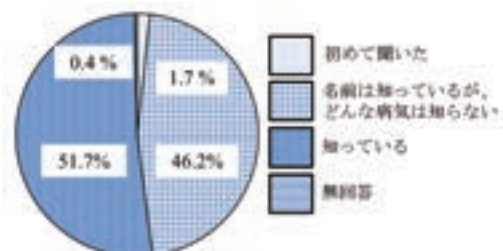


図4. 子宮頸がんを知っていますか。(n=296)

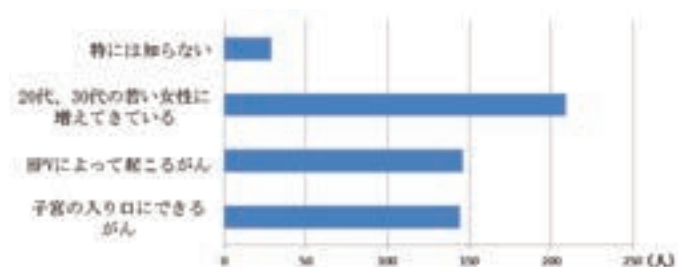


図5. 子宮頸がんについて知っていることについて (n=296 複数回答可)

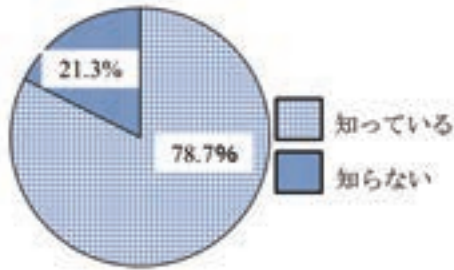


図6. 子宮頸がん検診を知っていますか。(n=296)

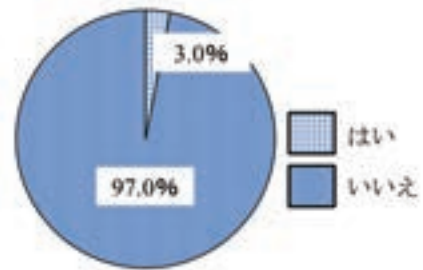


図7. 子宮頸がん検診を受けたことがありますか。(n=296)

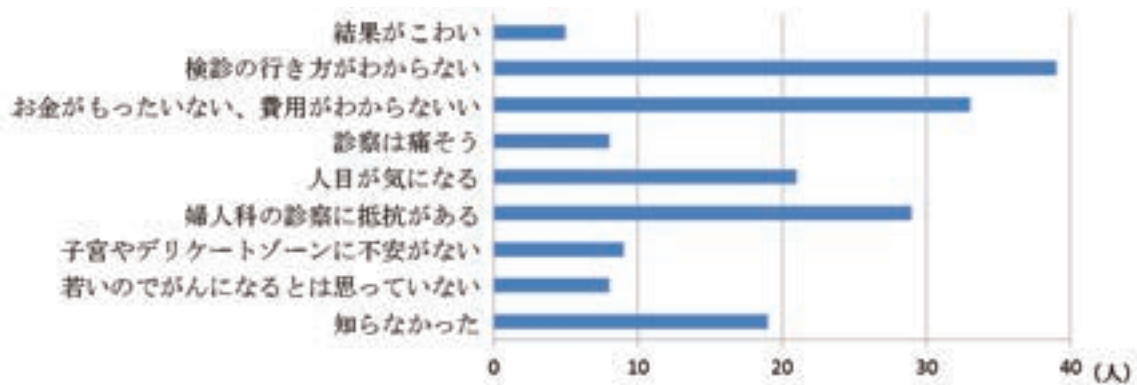


図8. 子宮頸がん検診を受けていないのはなぜですか。(n=296；複数回答可)

検診を受けない理由として、羞恥心や忙しくて時間が取れないが多く報告されている³⁾⁻⁴⁾が、野口ら⁵⁾の報告では「どうしたら検診を受けられるかわからない (22.7%)」、「費用 (20.9%)」が比較的高い回答率であった。この野口らの報告と本学で実施したアンケートは同様の結果で有り、医療系の大学という要因が関係していることが推察された。

3. 検診車を招請するまで

2011年度の子宮頸がん検診のアンケートを分析した結果、若年者の検診行動を促すためには「検診場所を提供し、費用も明確にする」ことが重要と考えられた。そこで、検診を大学構内で実施すること、また、検診費用を無料にすることで、学生の検診への受診行動を促すことが出来るのではないかと考えた。検診場所として大学構内は「検診車」の案が提案され、福岡市、福岡市南区保健所との折衝の末、2012年度の純真学園大学学園祭で、検診車の招請が決定した。

学園祭までにピアエディケーションサークルを

中心に、看護学科・検査科学科・医療工学科の教員のアドバイスの下、子宮頸がんに関する定期的学習会である「女子大生リボンムーブメント」との意見交換会で学生が発信したい情報を明確化すること、婦人科クリニックの見学で、実体験に基づいた情報の共有を行った。

学園祭当日は、検診を受診する学生の為に、事前に検診車の見学を実施、検診の時間と平行して婦人科医師による講演会、女子学生らが自ら検診の重要性について調べた発表を行った。また、学生が作製した子宮頸がんの発がんメカニズムとHPVの関連についてのパネルを展示し、がん患者の実話ビデオ上映をおこなった。この他に、細胞診標本を供覧し(図9)、がん細胞について細胞検査士が説明を行った。

2013年度は検診と子宮頸がんに関するポスター掲示、子宮頸がんに関連する市民公開講座と同時に開催し、2014年度は検診と子宮頸がんに関するポスター掲示を行った。



図9. 細胞診標本の供覧スペース (2012年度)

4. 検診を実施するにあたって

検診を行う際に特に注意する点として1) 検診には女性医師を配置すること2) 検診に使用する器具は痛みの少ないものを使用すること3) 問診を含めて検診会場では最大限にプライバシーに配慮することなどが申し合わされた(図10)。この他に、検査に対する「不安」や「恥ずかしさ」への配慮として、1) 待ち時間を少なくするために、検診は検診車2台で行う(図11)、2) 女性医師2名を配置する、3) 検査手順パネルを用いた検診の説明、検診車内の見学、4) 問診票と口頭での説明による受診の意思決定支援、5) 検診車入口にサポートスタッフの配置、6) 友達同士などの小グループ単位での検診受診勧奨、7) ピアエディケーションサークルのメンバーが検診への参加し、他の学生への情報提供を行う等も行った。さらに、検診事業者が受診者へ配慮した点としては、1) 新しい検診車を配置する、2) 女性婦人科医師を配置する、3) 採取器具は、対象が学生である事を考慮し、びらん・出血・痛みへの対応を含めて小型で柔らかいブラシを使用する、4) 検診車内を見学してもらい、検査手順を説明する、5) 質問等に返答して不安を取り除き、検査の意義を伝える、6) 初回受診者・性行為未経験者がいることを考慮し、検診の意義とリスクを説明するための文書を設け、問診時に説明し、内容を理解したうえで、あらためて受診を希望するか否かを選択する機会を設ける、などを行った。



図10. 検診での問診スペース (2014年度)



図11. 2台の検診車を配置 (2014年度)

5. 検診結果

2012年度87名(うち本学学生65名)、2013年度63人(うち本学学生50人)、2014年度70人(うち本学学生57人)で、近隣住民や他大学学生の受診もあった。このうち、学生受診者での要再検者数は、24年度2名、25年度1名、26年度1名であった。検診受診の際に実施したアンケートでは、検診受診を決定した要因として、「女性医師とわかったから」「無料だったから」「一緒に受ける友達がいるから」「産婦人科に行く必要がないから」などが比較的高い回答であった。

6. 考察

大学学園祭で検診車を招請するという、全国で初めての試みを行った。3年間で170人もの本学の学生が子宮頸がん検診を受診したことは、若年層、特に検診対象者が20歳前後であれば、大きな成果が期待できると考える。

これまで、女子大学生の子宮頸がん検診に対する意識行動を調べた報告はある²⁾⁻⁷⁾が、具体的な実施には至っていなかったことから、本学の試みは、若年者の子宮頸がん検診の具体的な実施方法として、全国の大学・短期大学に拡大することが望まれる。検診後のアンケート結果として、「無料だったから」、「産婦人科に行く必要がないから」などは我々が受診行動を促すポイントと考えていた点と合致しており、これらを解消したことが受診行動に結びついたと考えた。また、受診行動に関係する要因として「一緒に受ける友達がいたから」は大学構内で検診を実施するからこそ可能な状況だと考える。今回、検診対象が20歳前後大学生の検診受診者の中からも要再検者が出たことから、大学生を対象にした子宮頸がん検診は有効であると考ええる。

若い世代、特に女子大生の子宮頸がん検診の受診率向上の為には、身近な場所で受診機会を作ること、検診の意義等を十分に理解してもらうことが受診に繋がると考える。

7. 結語

今後とも、子宮頸がん検診について、受診する場所・機会を学生の身近に提供することで、若い世代の検診受診率を少しでも向上させたいと考える。

【参考文献】

- 1) 市町村がん検診実績〔平成23年度地域保健・健康増進事業報告（厚生労働省）〕, http://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/life/128693_50330852_misc.pdf
- 2) 河合晴奈, 高山沙代. 子宮がん検診の受診行動に関わる因子の検討. 石川看護雑誌, Vo.7, 59-68, 2010.
- 3) 志賀明子, 三浦信彦, 武山恒夫他. 子宮がん検診に関する意識調査, 人間ドック, 21 (3), 72-75, 2006.
- 4) 木村祐子, 臼井かほる. 女性健康診断受診者における子宮頸がん検診の非受診者要因についての検討. 第33回日本看護学会論文集-地域看護-, 85-87,

2003.

- 5) 野口真由, 杉浦絹子. 看護系大学の女子大学生がもつ子宮頸がん予防に関する知識と意識の現状. 三重看護学誌, 13, 131-139, 2011.
- 6) 平島太郎, 土屋耕治, 他. 態度の両価性が行動意図の形成に及ぼす影響-子宮がん検診の受診を対象にした検討-; 実験社会心理学研究 54 (1), 1-10, 2014.
- 7) 子宮頸がんに関する調査報告書-要約版-. 子宮頸癌から女性を守るための研究会. <http://www.cczeropro.jp/kenshin/img/result/result.pdf>.